

2) 蘚苔類

①概説

蘚苔類（コケ類）は、形態的な特徴などから蘚類、苔類、ツノゴケ類の3群に大別されている。岩月（2004）、Yamada & Iwatsuki（2006）は、日本産コケ植物として、蘚類1,135種、苔類612種、ツノゴケ類17種の計1,764種を記述している。県内では亜種、変種を含め、蘚類430種、苔類183種、ツノゴケ類6種の計619種の生育が確認されている（柿崎, 1988；太田, 2003）。

この植物群は、一部を除き陸上生活をするが増殖は胞子を形成して行われる。同様の生殖形態をもつシダ類と藻類のような水中生活をする植物の中間に位置づけられ、双方の特性を備えている。特に水との関わりが強く、これが蘚苔類の生存に大きな影響を与える。水環境の保全は極めて重要であり、湿原やその周辺の草原、森林の開発は慎重でなければならない。

ミズゴケ科のオオミズゴケ（Bランク）は、県内の低地から高地にいたる湿原や水湿草原の腐植土や土上に生えるが、平地の生育地は土地開発等によって破壊されている例が見られ、個体数が著しく減少している。下北半島東部では放牧地拡張のため湿原に排水路を開削したことから乾燥化が進行し本種の生育が脅かされている。一方、津軽半島では規模は小さいがミズゴケ湿原の埋め立てにより生育地の消滅を招き、また観光客の踏みつけにより個体数の減少が顕著なところも多い。

カワゴケ科の蘚類として県内ではコシノヤバネゴケ・クロカワゴケ・カワゴケ（共にBランク）の3種の生育が確認されている。科名のとおり「川（水）」と深い関わりをもつ種類であり、生育地は局限される。

コシノヤバネゴケは川岸や湖沼岸の樹木の根元などに着生する。クロカワゴケ、カワゴケは河川・池の水底や流木、河岸の杭などに生え、茎の長さは30cmを超えることもある。これらカワゴケ科蘚類の生存は、清涼な水と豊富な水量が確保されることが条件となる。このため森林の伐採や河川改修、水質汚染には十分な注意を払う必要がある。津軽半島でただ一か所記録されていたクロカワゴケの産地は水路をコンクリートとし、蓋をしたため今では見られなくなった。下北半島のカワゴケは、小河川に生育しているが、道路建設のため側溝として改修したことから個体数が減少傾向にある。さらに、流域にゴミの投棄が認められる産地もあり水質の汚染が危惧される。カワゴケ科蘚類の生育は水質の「良さ」を証明する指標とも言えよう。

シノブゴケ科のナガスジハリゴケ（Cランク）は、県内唯一の産地となる下北半島、桑畑山山腹の石灰岩洞穴で生育が確認されたことは、日本南方から本州北端を経て北海道に至る連続的な分布を立証することとなり、植物地理学上重要な種である（柿崎, 1977）。しかし、この生育地は岩石の風化、崩落などにより環境が悪化し産地の消滅と共に絶滅が危惧される。

苔類では、ウキゴケ科のウキゴケ、イチョウウキゴケ（共にBランク）は、主として各地の低地に広く分布し、池や沼などに浮遊あるいは干上がった湿土上に生える。しかし、水田の区画整理、水路の改修、農薬や生活排水による水質汚染などのため個体数や生育地が急激に減少している。県内では湿原内に残存する池沼、寺院の池や水田、用水路などに見られる。広範な湿性の草地を利用した公園造成のため埋め立てが行われたことから生育地が狭められ、排水路などに少数見られるが水質汚染や水源となる森林の伐採などによる水量の減少は生存に重大な悪影響を及ぼすことになる。近年、津軽地方で新たな産地が記録されていることは農薬使用の抑制等水質浄化の上から注目される。

（柿崎敬一）

②本文

ミズゴケ目 ミズゴケ科

B

和名 オオミズゴケ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Sphagnum palustre* L.

【形態的特徴】 大形で茎の長さは10cmを超え、茎葉は舌形で先端はささくれる。枝葉は広楕円形で深くくぼみ鱗状につき、横断面では葉緑細胞は狭二等辺三角形で底辺は腹面側にある。茎の表皮細胞には螺旋状の肥厚がある。

【選定理由】 特に平地から中山間地においては生育地・個体数共に減少している。

【分布と生態の概要】 北海道から九州、世界各地に分布する。県内では津軽半島・下北半島・八甲田山・岩木山など広範囲に見られ、低地から高地に至る湿原の地上や腐植土上に生育する。

【生存に対する脅威と保存対策】 放牧地や宅地造成など土地開発による湿原の消滅や乾燥化。

(柿崎敬一)

イヌマゴケ目 カワゴケ科

B

和名 コシノヤバネゴケ

環境省：絶滅危惧Ⅰ類

学名 *Dichelyma japonicum* Cardot

【形態的特徴】 茎の長さは3～7cm、葉は長さ4mmほどで狭卵状披針形、中肋部で二つ折りになり、先端に小歯があつて葉縁は反曲する。中肋は葉先に達する。

【選定理由】 産地が局限されており、生育環境の悪化によって個体数の減少が危惧される。

【分布と生態の概要】 北海道・本州（中部地方以北）に分布し、県内では赤石川流域（齋藤, 1986）と津軽半島の河川源流部の2か所で生育が確認されている。

産地は局限されており、希少種である。川や沼の岸辺に生える木の根元などに着生する。

【生存に対する脅威と保存対策】 森林の伐採や河川・湖沼の護岸工事等による水量の減少や水質汚染など。

(柿崎敬一)

イヌマゴケ目 カワゴケ科

B

和名 クロカワゴケ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Fontinalis antipyretica* Hedw.

【形態的特徴】 暗緑色で、茎は長く30cmを超えることもあり不規則に枝分かれする。葉は長さ3～8mmで3列につき、中肋はないが中央でアヤメの葉のように二つ折りになる。

【選定理由】 産地が少なく、個体数の減少や絶滅が危惧される。

【分布と生態の概要】 北海道から本州、北半球に分布する。県内では津軽・下北半島の数か所で記録されている（齋藤, 1986；柿崎, 1987）。きれいな水の流れる河川の水の中や岸辺の杭などに着生する。

【生存に対する脅威と保存対策】 河川の護岸や水路改修による生育地の消滅、森林伐採に起因する水量の減少・水質汚染。

(柿崎敬一)

イヌマゴケ目 カワゴケ科

B

和名 カワゴケ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Fontinalis hypnoides* Hartm.

[形態的特徴] 茎は長く、葉は長さ5mm前後でクロカワゴケよりまばらにつく。中肋はなく、卵状披針形で二つ折りにはない。

[選定理由] 産地が少なく、水質汚染の指標とされる極めて貴重な種である。

[分布と生態の概要] 北海道から本州、北半球に広く分布する。県内では下北半島で記録されている（柿崎, 1987；柿崎ら, 2006）。湧水などのある川や池沼の水底に生える。

[生存に対する脅威と保存対策] 森林の伐採・河川改修・道路の改修工事等による水量の減少や河谷の埋め立てなど生育地の破壊や水質の汚濁・汚染の防止および湧水等水量の確保をはじめとする生育環境の確保が急務である。

（柿崎敬一）

シトネゴケ目 ヒゲゴケ科

B

和名 トガリカイガラゴケ

環境省：絶滅危惧Ⅰ類

学名 *Myurella tenerrima* (Brid.) Lindb.

[形態的特徴] 小形糸状で長さは10mm前後、茎は葉を含めて0.5mmほどで這い、絡み合う。葉はあまり密につかず葉細胞の上端にパピラがある。

[選定理由] 全国的にまれな種であり、個体数も少なく絶滅が危惧される。

[分布と生態の概要] 本州・中国・ロシア東部・欧州・アフリカに分布する。県内では白神山地（高谷ら, 1993）と弘前市（柿崎・太田, 2003）にそれぞれ1か所の産地が記録されている。ブナ林など森林内の地上や土に覆われた岩に小群落を形成する。白神山地ではブナ・ミズナラなどの森林伐採地に隣接した地点で見られるが、林内の乾燥化が進行しているため個体数の減少が危惧される。

[特記事項] 弘前市で採集された標本は孢子体（蒴）をつけており注目される。

（柿崎敬一）

シトネゴケ目 ヤナギゴケ科

B

和名 ササオカゴケ（アオモリカギハイゴケ）

環境省：絶滅危惧Ⅰ類

学名 *Sasaokaea aomoriensis* (Paris) Kanda

[形態的特徴] 大形で茎の長さは10cmを超えることもある。羽状に枝分かれし、先の分かれた毛葉をつける。葉はまばらにつき長さ3～4mm、卵状披針形でくぼむ。葉先近くの葉縁には小歯がある。中肋は1本で葉長の3/4以上に達する。

[選定理由] 産地、個体数の減少（絶滅）が危惧される。

[分布と生態の概要] 本州から九州、中国に分布する。県内では青森市で記録されている（Kanda, 1976）。低地の沼や池などの周辺で、ヨシの生育するような湿地に生える。

[生存に対する脅威と保存対策] 土地造成に伴う湿地の埋め立てや水質汚染。

[特記事項] Parisが1904年、フォーリー（U. Faurie）が青森で採集した標本（Faurie 2817）に基づきアオモリカギハイゴケ *Hypnum aomoriense* として記載した種である。本県を基準産地とする種であるが、現況は不明であり今後の調査に待ちたい。

（柿崎敬一）

シトネゴケ目 サナダゴケ科**B**

和名 マッカリタケナガゴケ

環境省：絶滅危惧Ⅰ類

学名 *Plagiothecium obtusissimum* Broth.

[形態的特徴] 小形で、葉は長さ1mm内外、楕円状卵形で先端は円頭から鈍頭である。葉の翼部の細胞は薄壁透明で、基部の他の細胞から明瞭に区別される。莖柄は長さ8～15mmで赤褐色である。

[選定理由] 希産種とされる貴重な種である。

[分布と生態の概要] 北海道から本州、極東ロシアに分布する。県内では八甲田山で記録されている (Deguchi, 1981)。北方系の種で、日陰の岩上や地上・腐木上に生える。

[生存に対する脅威と保存対策] 森林の伐採等による空中湿度の低下や乾燥化・大気汚染など生育環境の悪化により個体数の減少が危惧される。

(柿崎敬一)

ゼニゴケ目 ウキゴケ科**B**

和名 ウキゴケ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Riccia fluitans* L.

[形態的特徴] 葉状体は淡緑色、長さは1～5cm、幅0.5～1mmで規則的に二分岐する。

[選定理由] 農村部に限らず都市近郊にも広く見られたが生育地、個体数共に減少傾向にある。

[分布と生態の概要] 北海道から沖縄、全世界に分布する。県内では下北半島 (柿崎ら, 2006) や津軽半島 (太田, 2002) ・三沢市 (柿崎ら, 2003) などで記録されている。池や水田、用水路などの水中や干上がった湿土上に生育する。

[生存に対する脅威と保存対策] 土地開発による湿地・池沼の埋め立てによる生育地の消滅・生活排水・農薬による水質汚染など。

(柿崎敬一)

ゼニゴケ目 ウキゴケ科**B**

和名 イチョウウキゴケ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Ricciocarpos natans* (L.) Corda

[形態的特徴] 葉状体は緑色から赤紫色、長さ1～1.5cmで、二分岐の繰り返しによって全体としてイチョウの葉形になる。

[選定理由] 生育地、個体数共に減少傾向にある。

[分布と生態の概要] ウキゴケと同様、世界中に広く分布する。県内では下北半島 (柿崎ら, 2006) ・津軽地域 (太田, 2002) ・三沢市 (柿崎・太田, 2001) で記録されている。水田や池・用水路などに浮遊するが湿土上にも生える。ウキゴケと混生することもある。

[生存に対する脅威と保存対策] 生活排水・農薬などによる水質汚染や土地造成・農地の転作等は生育に大きく関与する。生育地の保全と水環境の浄化を図る必要がある。

(柿崎敬一)

シッポゴケ目 キンシゴケ科

C

和名 アオゴケ

環境省：該当なし

学名 *Saellania glaucescens* (Hedw.) Broth.

小形で茎の長さは1～1.5cmほどで、青白色のカビを帯びたような特異な色相に見える。この色はある種の化学物質によるものとされている。北海道から本州、北米・欧州・アジア・ニュージーランド等に分布し、両極分布型を示す。中部地方以北の寒冷地で地上や岩上に生えるが、近畿地方以西では生育地が局限される。県内では八甲田山 (Deguchi, 1981) と横浜町 (柿崎・太田, 2001) で記録されている。林道の開削や森林の伐採などによる生育地の荒廃により個体数の減少が懸念される。

(柿崎敬一)

シッポゴケ目 シッポゴケ科

C

和名 マユハケゴケ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Campylopus fragilis* (Brid.) Bruch et Schimp.

小形で茎の長さは1.2～2cm、茎頂の葉腋短枝上に多くの無性芽を球状につける。本州・四国、東南アジア・欧州・北米・アフリカに分布する。山地帯から亜高山帯の沼沢地上に生える。県内では八甲田山で記録されている (Deguchi, 1981)。希産種で、国内では胞子体 (蒴) は未知である (岩月ら, 2001)。遊歩道や排水溝などの敷設、改修による生育地の乾燥化等生育環境の悪化により個体数の減少が危惧される。

(柿崎敬一)

シッポゴケ目 シッポゴケ科

C

和名 ヒロスジツリバリゴケ

環境省：絶滅危惧Ⅰ類

学名 *Campylopus gracilis* (Mitt.) A. Jaeger

茎の長さは2～3cm、茎葉の中肋は幅広く上部では全体を占め、先端には少数の歯があるが透明にはならない。中肋の背面には細胞の起きあがりによる凹凸がある。葉の先端が折れて無性的に繁殖する。本州から九州、朝鮮半島・中国・ミャンマー・タイ・ネパール・欧州・北米に分布する。県内では唯一青森市で記録されている (Takaki, 1967)。高地のやや日当たりの良い岩上や地上に生えるが、本産地は標高100mほどの低山地であり注目される。産地が局限され、希産種として知られる。都市公園整備のため道路の開削、これに伴う樹木の伐採などにより環境が著しく改変し、現時点ではこの産地での生育は確認できない。

(柿崎敬一)

シッポゴケ目 シラガゴケ科

C

和名 シロシラガゴケ

環境省：情報不足

学名 *Leucobryum glaucum* (Hedw.) Åongstr.

コケ庭に利用されるホソバオキナゴケに似るが、大形で茎の長さは5cmほどになる。葉は披針形で長さ5～7mm、葉身部の縁は弱く内曲する。葉基部の透明細胞は数層あって細胞膜はほとんどくびれない。北海道から本州、北半球に分布する。県内では十和田湖畔で記録されている (野口, 1959)。高層湿原周辺の木の根元などに塊状に生える。土地開発や樹木の伐採などによる湿原の消滅・乾燥化等・生育環境の悪化により個体数の減少が危惧される。

(柿崎敬一)

ホンマゴケ目 ハリガネゴケ科**C**

和名 ホソバゴケ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Mielichhoferia japonica* Besch.

小形で茎の長さは3mm以下。葉は茎に覆互状につき、長さ約1mmの卵状披針形で先端近くには歯があり葉身細胞は薄壁で表面に微細な肥厚がある。外蒴歯はなく、内蒴歯は痕跡的である。北海道から本州、中国・極東ロシアに分布する。県内では八甲田山で記録されている (Deguchi, 1981)。火山地の湿岩上にマット状に生える希少種である。登山者の踏みつけによる剥離や大気汚染など生育環境の悪化により個体数の減少が危惧される。

(柿崎敬一)

ホンマゴケ目 ハリガネゴケ科**C**

和名 カサゴケ

環境省：該当なし

学名 *Rhodobryum roseum* (Hedw.) Limpr.

大形で茎の長さは5cmを超える。匍匐茎があり葉は茎の頂部に集合してつくので傘状となる。葉はへら形から倒卵形で16~21枚つき、葉先は鋭頭、葉縁には鋸歯があり中肋は葉頂に達しない。北海道から四国、ヒマラヤ・欧州・北米西部に分布する。県内では岩木山で記録されている (Horikawa, 1955)。多雪地帯の林下地上や腐植土上に生える希少種である。林内遊歩道 (登山道) の崩落や樹木の刈り払い、踏みつけなどによる生育地の破壊や森林の伐採によって個体数が減少している。

(柿崎敬一)

ホンマゴケ目 ヒモゴケ科**C**

和名 オオヒモゴケ

環境省：該当なし

学名 *Aulacomnium palustre* (Hedw.) Schwägr.

茎の長さは10cm近くにもなり、葉は茎に接するため径約1.5mmのひも状となる。葉身細胞は厚角で中央に1個パピラがある。北海道から本州 (中部地方以北) ・世界各地に分布する。県内では八甲田山 (Deguchi, 1981) ・岩木山周辺 (柿崎, 1987) ・下北半島の太平洋岸 (柿崎ら, 2006) で記録されている。低地から高地にいたり広く見られる。湿原や休耕田・沼沢地周辺の湿地上・湿岩上に生える。特に低地では土地開発に伴う湿原の埋め立てによる生育地の消滅・水質汚染などによって個体数が減少傾向にある。

(柿崎敬一)

シトネゴケ目 シノブゴケ科**C**

和名 モミシノブゴケ

環境省：該当なし

学名 *Abietinella abietina* (Hedw.) M. Fleisch.

大形で茎は匍匐し長さ10cm近くにもなる。規則正しく1回羽状に枝分れしシダ植物のシシガシラのような形状となる。葉身細胞の背面中央に1個のパピラがある。北海道から四国、北半球に分布し、高山の地上や岩上に群落を形成する。県内では下北半島で記録されている (柿崎・太田, 2001)。国内では孢子体 (蒴) は見つからない。希少種で産地は局限される。放牧地に開削された路崖の岩上に生育しているが、規模は小さい。森林伐採による乾燥化の進行により生育環境が悪化しており、絶滅が危惧される。

(柿崎敬一)

シトネゴケ目 シノブゴケ科

C

和名 ナガスジハリゴケ

環境省：該当なし

学名 *Claopodium prionophyllum* (Mull. Hall.) Broth.

繊細でやや羽状に枝分かれする。茎葉は長さ1～1.2mmで広卵形の下部から細く伸び葉縁には微歯があり、中肋は葉先から長く突出する。枝葉は披針形で、葉身細胞は丸みのある方形から六角形で中央に1個のパピラがある。乾燥すると肉眼では細い糸くずが絡み合ったように見える。北海道から琉球、熱帯アジア・フィジー・ハワイに分布する。県内では下北半島東部で記録されている(柿崎, 1977; 柿崎・太田, 2001)。石灰岩上に生えることから分布が局限される。周辺の森林伐採による風化の進行、岩石の崩落等による生育地の埋没によって個体数の減少・絶滅が危惧される。この記録によって我が国における本種の連続的な分布が明らかとなった。

(柿崎敬一)

シトネゴケ目 ヤナギゴケ科

C

和名 ササバゴケ

環境省：該当なし

学名 *Calliergon cordifolium* (Hedw.) Kindb.

茎は長く、10～20cmに達し、不規則に羽状に枝分かれする。茎葉は長さ2～3mm、長い卵形で円頭である。葉基部は広く下延し細胞は大きく透明である。中肋は1本で葉先近くに達する。枝葉は小さく先端は尖ることがある。莖柄はかなり長く5～9cmである。北海道から本州、北半球・ニュージーランドに分布する。県内では弘前市(太田・柿崎, 2003)、六ヶ所村(柿崎ら, 2006)などで記録されている。河川や沼沢地周辺の湿地に生える。開田や宅地造成など土地開発による生育地の消失と水質汚染などにより個体数が減少傾向にある。

(柿崎敬一)

シトネゴケ目 ヤナギゴケ科

C

和名 ヤリノホゴケ

環境省：該当なし

学名 *Calliergonella cuspidata* (Hedw.) Loeske

茎は10cmほどの長さとなり、横向きにまばらに枝を出し、葉はあまり展開せず、枝先は尖るので槍のような形になる。茎葉は卵形から楕円状卵形でくぼみ、葉先は円頭(短尖頭)、中肋は短くて2本(欠くこともある)。北海道から九州、世界各地に分布する。県内では八甲田山(Kanda, 1978)・津軽半島(齋藤, 1986)・下北半島(柿崎ら, 2001)で記録されている。湿原や湿り気のある草地の土上に生える。特に低地の産地では宅地や工業用地の造成・埋め立てなど土地開発によって生育地が減少している。

(柿崎敬一)

シトネゴケ目 ツヤゴケ科

C

和名 ホソバツヤゴケ

環境省：絶滅危惧II類

学名 *Orthothecium rufescens* (Brid.) Schimp.

大形で、茎は長く5～10cm、黄緑色(褐色～紅色)でつやがある。枝葉は披針形で長さ2～4mm、先端は細く尖り深い縦じわがある。葉身細胞は線形、厚膜、葉基部の細胞壁にはくびれがあり、中肋は不明瞭である。北海道から本州、中国・ロシア・欧州・北米に分布する。県内では津軽山地(太田, 2000)、白神山地で生育が確認されている。岩上に着生し、分布は局限される。林道や遊歩道の開削や森林伐採による生育地の環境悪化により個体数の減少が危惧される。

(柿崎敬一)

和名 ミヤマミズゼニゴケ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Calycularia crispula* Mitt.

葉状体は（褐）緑色で長さ2～4 cm、幅5～7 mm、先端は二叉状に分岐する。葉縁は波状で中肋部はやや明瞭である。腹鱗片は線形、外側に2～3本の長毛がある。油体は各細胞に20～40個あって均質に配列する。胞子の表面に長短のとげを密生する。北海道から九州北部、東アジア・ヒマラヤ・メキシコに分布する。県内では大鱒山地で記録されている（太田, 2002）。ブナ帯の古生層が存在する湿岩上に生える。本県では近年発見された種であり、森林伐採に伴う水量の減少による乾燥化の進行によって個体数の減少が危惧される。

（柿崎敬一）

ミズゴケ目 ミズゴケ科 **D**

和名 ホソベリミズゴケ
 学名 *Sphagnum junghuhnianum* Dozy et Molk.
 環境省：情報不足

茎の長さは5～10cm。茎葉は二等辺三角形で長さ1.2～1.6mmである。また、先端は三角状（切形）で鋸歯があり、舷は基部で3～5細胞列でほとんど広がらない。枝葉背面の透明細胞中央部には数個の肥厚した孔があるが腹面にはない。本州から九州、台湾・中国・ヒマラヤに分布する。県内では八甲田山で記録されている（村井, 1935）が、その後、発見されていない。今後の調査が望まれる。滲出水のある岩壁面や岩棚などに生育する。
 （柿崎敬一）

シトネゴケ目 サナダゴケ科 **D**

和名 オオサナダゴケ
 学名 *Plagiothecium neckeroideum* Bruch et Schimp.
 環境省：絶滅危惧Ⅱ類

黄緑色、葉は卵状披針形で非相称、扁平につき、上半部は強く波打ち長さは3～4mmである。葉の先端は鋭頭で細胞は分化して幅広くなり、仮根や無性芽をつける。北海道から九州、中国・欧州に分布する。県内では平内町（Bescherelle, 1893）と大鰐町（齋藤, 1986）で記録されている。高地に多く見られ、岩上や腐植土上・地上・時には木の根元などに生える。樹木の伐採や土地開発などによって個体数の減少が危惧される。
 （柿崎敬一）

ウロコゴケ目 コヤバネゴケ科 **D**

和名 ケスジヤバネゴケ
 学名 *Cephaloziella elachista*
 (Gottsche et Rabenh.) Schiffn.
 環境省：絶滅危惧Ⅱ類

植物体は長さ15mmに達する茎葉体で、幅は葉を含めて0.2～0.3mm。葉先の切れ込みは2/3以上で2裂し葉基部に長刺をつける。本州（青森県・福島県・京都府）、欧州・北米に分布する。県内では八甲田山でのみ記録されている（北川, 1978）。湿原でミズゴケ類と混生する。生育地局限、希少種であり湿原の乾燥化や水質汚染による個体数の減少が危惧される。今後の広域的な調査が待たれる。
 （柿崎敬一）

シッポゴケ目 シッポゴケ科 **D**

和名 シマオバナゴケ
 学名 *Trematodon semitortidens* Sakurai
 環境省：該当なし

小形で、茎の長さは3～6mmである。葉は密につき、幅広い鞘部から急に針状に伸び、この部分には中肋で占められる。蒴柄は黄色で長さは1cm以下、乾いた時は直立或いは多少くねる。本州から九州に分布する。県内では八甲田山で記録されている（Deguchi, 1981）。日本固有種で、産地は局限され、高山を流れる水路の岸辺などの湿土上に生える。歩道の敷設、入山者の湿原への踏み込みなどにより個体数の減少が危惧される。
 （柿崎敬一）

ウロコゴケ目 コヤバネゴケ科 **D**

和名 オソレヤマヤバネゴケ
 学名 *Cephaloziella divaricata* (Sm.) Schiffn.
 環境省：該当なし

茎の長さは数mmで、葉の背面や茎の表面にしばしば多細胞性の突起があり、葉身細胞は薄壁からやや厚壁である。腹葉は大きい。北海道から本州、北半球・アフリカ・オーストラリアに分布する。県内では下北半島で記録されている（Kitagawa, 1965）。高地の湿岩や崖上に生える。森林伐採や道路の開削などによって個体数の減少が懸念される。
 （柿崎敬一）

ウロコゴケ目 ミゾゴケ科 **D**

和名 ハッコウダゴケ
 学名 *Eremonotus myriocarpus* (Carrington)
 Lindenb. et Kaal. ex Pearson
 環境省：絶滅危惧Ⅰ類

茎の長さは0.5～1cm、茎葉体は緑褐色で鞭糸状である。葉は2裂して小さく、腹葉はない。葉腋際の茎の表皮細胞は他の細胞より著しく大型である。本州（青森県・長野県）に分布し、高地（高山帯）の湿った崖や岩上に着生する。県内では八甲田山でのみ記録されている（Kitagawa, 1966）。分布が局限される希少種であり、岩石の崩落、水質や大気汚染による個体数の減少が危惧される。広域的な調査が望まれる。
 （柿崎敬一）

③引用文献

- Bescherelle, Em. 1893. Nouveaux documents pour la flore bryologique du Japon. Ann. Sci. Nat., ser. 7, Bot. 17: 327-393.
- Deguchi, H. 1981. Mosses of Mts. Hakkoda, Northern Japan. Ecological Review, 19(4): 187-235.
- Horikawa, Y. 1955. Distributional studies of Bryophyte in Japan and adjacent regions. Hikobia, Hiroshima. 152pp.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp. 192Pls.
- Iwatsuki, Z. 2004. New Catalog of the mosses of Japan. J. Hattori Bot. Lab., 96: 1-182.
- 岩月善之助・古木達郎・神田啓史・長谷川二郎・樋口正信 2008. 蘚苔類レッドリスト, 2007年版. 蘚苔類研究, 9(8): 259-267.
- 柿崎敬一 1977. 青森県産蘚類 (2). 青森県立郷土館調査研究年報, 3: 109-112.
- 柿崎敬一 1987. 青森県産蘚類 (4). 青森県立郷土館調査研究年報, 11: 65-76.
- 柿崎敬一 1988. 青森県産蘚類目録 (予報). 青森県立郷土館調査研究年報, 12: 69-96.
- 柿崎敬一・太田正文 2001. 下北半島東部のコケ植物. 青森県立郷土館調査研究年報, 25: 101-114.
- 柿崎敬一・高谷泰三郎・齋藤信夫・小林範士・太田正文 2003. 小川原湖周辺の植物 (3). 青森県立郷土館調査研究年報, 27: 51-56.
- 柿崎敬一・高谷泰三郎・齋藤信夫・小林範士・太田正文・神真波 2006. 小川原湖周辺の植物. 青森県立郷土館調査研究年報, 30: 49-80.
- 柿崎敬一 2006. 蘚苔類. 青森県の希少な野生生物—青森県レッドデータブッカー維管束植物以外編. pp. 8-19. 青森県.
- Kanda, H. 1976. A revision of family Ambrystegiaceae of Japan I. Jour. Sci. Hiroshima Univ., ser. b. div. 2, 15(2): 201-276.
- Kanda, H. 1978. A revision of family Ambrystegiaceae of Japan II. Jour. Sci. Hiroshima Univ., ser. b. div. 2, 16(1): 41-119.
- 北川尚史 1965. 日本近接地域のLophoziaceaeの研究 I. J. Hattori Bot. Lab., 28: 239-291.
- 北川尚史 1966. 日本近接地域のLophoziaceaeの研究 II. J. Hattori Bot. Lab., 29: 101-149.
- 北川尚史 1978. 日本新産 *Cephaloziella elachista*. Misc. Bryol. Lichenol., 8: 9.
- 村井三郎 1935. 十和田湖・八甲田山の植物, X. 十和田湖・八甲田山の蘚類目録. pp. 169-206. 青森営林局.
- 野口 彰 1959. 十和田湖畔の蘚苔類植生. 生態学研究, 15(1): 54-64.
- Noguchi, A. 1991. Illustrated moss flora of Japan. Part 4. Hattori Bot. Lab., pp. 743-1012.
- Noguchi, A. 1994. Illustrated moss flora of Japan. Part 5. Hattori Bot. Lab., pp. 1013-1253.
- 太田正文 2000. 梵珠山の蘚苔類. 青森県立郷土館調査研究年報, 24: 125-133.
- 太田正文 2002. 青森県南西部のタイ類 (1). 青森県立郷土館調査研究年報, 26: 97-104.
- 太田正文 2003. 文献に基づく青森県産タイ類・ツノゴケ類チェックリスト. 青森県立郷土館調査研究年報, 27: 79-92.
- 太田正文・柿崎敬一 2003. 青森県立郷土館所蔵コケ植物標本 (1). 福田均氏採集弘前市子供の森久渡寺山における蘚苔類. 青森県立郷土館調査研究年報, 27: 107-114.
- 齋藤信夫 1986. 青森県産の蘚苔類—手持ちの蘚苔類標本—. 東北植物研究, 3: 7-17.
- Takaki, N. 1967. A revision of Japanese *Campylopus*. J. Hattori Bot. Lab., 30: 231-248.
- 高谷泰三郎・齋藤信夫・小林範士・柿崎敬一・太田正文 1993. 白神山地自然調査概要 (2) 植物. 青森県立郷土館調査研究年報, 17: 11-29.
- Yamada, K. and Z. Iwatsuki 2006. Catalog of the Hepatics of Japan. J. Hattori Bot. Lab., 99: 1-106.